◇ 国　語

国 7－1～国 7－17 まで 17 ページあります。

第一問　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

(a)人間は考える葦(あし)である、というパスカルの良く知られた言葉があります。

確かにわれわれ人間の最大の特徴は、二本足で歩くことでも、手を使うことでも、笑うことでもありません。喋(しゃべ)ることでさえないでしょう。

考えるというのは哲学者の(b)専売特許でもなければ、科学者の専売特許でもありません。人間誰もに備わっているごく普通の心の働きです。

何かについて考えることはごく自然に出来ますが、何かについて考えるとはどういうことかを考えるのは自然にはできません。たとえば平和ということについて自分なりに考えることはなんとなく出来そうですが、「平和について考えるとはいったいどういうことなのか」について考えるのは、大変難しいのです。

日常の営みとして「何かについて」考えることは誰もがやっている事ですが、その日常の営みである「考えること自体について」考えることは、誰もがやっているわけではありません。

ま、暇な学者がやっているのです。

パスカルのように、「人間は考える」という［　ア　］事実を述べるのは比較的やさしいのですが、「考えるとはこれこれこういうことである」と述べるのは難しいのです。

こういう難しい問題は、正面突破をはからず、側面から攻撃してみるのがよさそうです。

それが本書のわかる・わからないダンギ(A)です。

われわれは「わかった？」「いやわからない」「あ、わかった」「うーん、もうちょっとでわかりそう」「もう何がなんだかわけがわからない」などと言い交して毎日を送っています。

このわかる・わからないという表現は、考えるからこそ出てくる言葉です。すべてわかっていれば考えることはありません。

わかるという表現すら必要ないでしょう。わからないことがあるからこそ、わかったというジタイ[B]も発生するのです。わからないことがわかったと思えるようになるのは、考えたからです。考えなければ、わからないままです。

われわれは意識的に考えるだけでなく、無意識的にも考えています。何をどう考えているかというところに気が付かないままで何かを考えているのです。考えるというのはプロセスで、途中経過ですから、その状態はなかなか捕捉出来ません。

［　イ　］、考えるというプロセスがなんらかの形で終結すると、わかった・わからないという比較的はっきりした心の変化を感じることが出来ます。わかる・わからないという感情が湧くのです。

このわかる・わからないという感情の原因となる心の動きが、考えるということにほかなりません。

思考とか理解ということが問題になると、すぐ演繹（えんえき）とか帰納とかカンゲン[C]とかいう難しい話におちいりがちですが、それは心の働きの一部で、すべてではありません。

(二)心の働きはもっと多様で、かつ複雑です。

心の働きには大きくふたつの水準があります。

ひとつは感情で、もうひとつは思考です。

感情は心の全体的な動きで、ある傾向を表します。なんとなく好き、なんとなく嫌い、なのであって理由ははっきりしません。あるいはなんとなく憂鬱であり、なんとなく楽しいので、なぜこう憂鬱なのか、なぜこう楽しいのか、感じている本人自身にもはっきりしないものです。

いっぽう、思考は心像という心理的な単位を縦に並べたり、横に並べたりして、それらの間に関係を作り上げる働きです。感情と違って、「心像」というある程度形あるものを相手にします。思考というと哲学者が何か難しい問題を考えている時の心の働きであって、「自分には関係ない」と思われるかもしれませんが、筆者がいう思考は決してそんな難しいことではありません。われわれは誰でも、朝から晩まで思考を働かせているのです。

米国で大人気の新聞レンサイ[D]漫画にビル・ワッターソンという人の「カルビンとホッブス」というものがあります。

このカルビン[三]というなんともかわいい悪ガキは算数が大の苦手で、作文が苦手で、とにかく勉強が苦手です。教室では隣にスージーという賢い子が座っていて、しょっちゅういざこざを起こしています。この間もスージーに「この宿題してくれたら二五セントあげる」と持ちかけていました。スージーが二倍だったら引き受けると挑発すると、「わかった。じゃ三五セントだね」と、算数の苦手なところをバクロ[E]して、またまたスージーに馬鹿にされていました。

この「二五セントを二倍するとどうなるか」という問いの答えを見つけるのが「考える」ということです。カルビンは「二五の二倍」を「三五」と考えたわけですね。

あるいは苦手の宿題を与えられて「スージーにお金をやって、この宿題をやらせよう」というのも、思考です。

わかる・わからないについて言えば、25 × 2 ＝ 35 と考えているわけですから、「わかっていない」わけですが、そのことについては今は考えないことにしましょう。

「スージー＋二五セント＝宿題完成」という筋書きも、実はスージーには当てはまらない筋書きなのですが、カルビンの考えはそこまでは回転しません。

この四コマ漫画に出てくる、「宿題」「二五セント」「二倍」「三五セント」「スージー」などは、そのひとつひとつが、じつはカルビンの頭に浮かんでいる心像です。

カルビンは自分のかわいい頭の中でこれらの心像を結び合わせ、スージーに二五セントやれば、スージーは喜んで宿題をしてくれるだろうと、「宿題が無事出来上がった状態」を想像しているのです。これが思考です。

では、思考の単位になっている心像とはいったい何なのでしょうか。

心像は客観的事実ではありません。事実は自分のまわりに生起する出来事や、自分のまわりに存在する事物で、万人が認める現象です。実際に起こったこと、実際に起こること、実際にあるものです。

これに対し、心に思い浮かべることの出来るすべての現象を心像といいます。つまり心理的イメージです。ただ、イメージという表現はあまり正確ではありません。イメージは形あるもの、つまり図像を意味します。「二五セント」や「スージー」はた

しかにイメージですが、「二倍」はイメージではありません。計算手続きについての約束事です。図像ではありません。二倍ならまだイメージ出来るかも知れませんが、千倍、万倍になると、イメージは作れません。実際、カルビンは二倍がちゃんとわかっていません。「宿題」も視覚化出来ない概念です。

(三) 心像という言葉を持ち出したのはそのためです。心像もメンタル・イメージの訳語ですが、そこは大目に見てください。現在使われているイメージという言葉は視覚映像のニュアンスが強いので、わざと心像にしました。心像は視覚映像だけではありません。触覚、聴覚、嗅覚、味覚など視覚化出来ない心理現象を含みます。これらをすべて含む用語としては、正確には心理表象という言葉を選ぶべきなのですが、長いし、なじみも薄いのでやめにしました。

(四) 太陽が東から昇り、西へ沈むのは、地球が自転しているせいで、太陽が動いているせいではありません。しかし、われわれには太陽が昇り、太陽が沈むとしか見えません。動いているのは太陽であって、じっとしているのはわれわれです。

地球の自転は事実で、太陽が動くのは心像です。

事実は自分という心がなくても生起し、存在し続ける客観的現象です。心像は心がとらえる［　ウ　］現象です。

われわれの心の働きに重要なのは心像であって、客観的事実ではありません。心像を扱うのが普通の心の働きで、客観的事実は心にとってはあってなきがごときものです。もっと正確にいえば、われわれの心は心像しか扱えないのです。客観的事実を扱うには、普通の心の働きとは別の心の働きが必要です。われわれは地球が自転しているなどということは知らずに何万年も生きてきました。今だって、そんなことを知らずに生きている人はいっぱいいるはずです。われわれは「太陽が昇る」「太陽が沈む」という事柄を心像化して経験できますが、「地球が自転している」という事実は経験できません。

（山鳥重『「わかる」とはどういうことか』による）

問一　傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A　ダンギ

①校庭のカダンには三種類の種を蒔く　②不気味で恐ろしいカイダン話は嫌だ
③昨年よりもカクダンに上達している　④この道は夜もカンダンなく車が通る
⑤ダンリョクのあるマシュマロが好き

1

B　ジタイ

①妹のコップに入った謎のエキタイ　②タイセキした土砂を取り除く
③台風のため自宅でタイキする　④家族と意見がタイリツしている
⑤コノハチョウは枯れ葉にギタイする

2

C　カンゲン

①遠い国からキカンする　②血液がジュンカンする
③窓を開けてカンキする　④新入生をカンゲイする
⑤出来ばえにカンタンする

3

D　レンサイ

①原稿の提出をサイソクする　②この松のボンサイは見事だ
③きれいな布をサイダンする　④重要な情報をキサイする
⑤サイブまで丁寧に確認する

4

E　バクロ

①不満の色をロコツに表す　②ワイロをもらってはいけない
③野菜をフロシキで包む　④鉄を溶かすヨウコウロ
⑤電車はセンロの上を走る

5

問二　傍線部（a）「人間は考える葦である」で使用されている修辞法として、最も適当なものを次の①～⑤から一つ選べ。　6

①反語　②擬人法　③暗喩　④倒置法　⑤体言止め

問三　傍線部（b）「専売特許」の本文中の意味として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。　7

①著作物を他人に無断で使用されない権利
②発明した製品を独占的に使用できる権利
③物事を簡便に説明できる技術や方法
④特定の人がある場所を独占できる権利
⑤その人だけが許されている行動や技術

問四　空欄 ア ・ イ ・ ウ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア　8
①一時的　②一般的　③両義的　④逆説的　⑤例外的

イ　9
①なぜなら　②または　③しかし　④例えば　⑤これにより

ウ　10
①科学的　②集団的　③物理的　④積極的　⑤主観的

問五　傍線部（一）「心の働き」を説明した文章として適当でないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

11

①「二五セントを二倍するとどうなるか」という問いの答えを見つけること。
②外の景色を眺めている時に、「なんとなく楽しいな」と感じたこと。
③雨が降りはじめたので、帰路はずぶ濡れになるだろうと想像すること。
④壁に掛けてある温度計をみて、現在の気温と湿度を正確に記録すること。

問六　傍線部（二）「カルビン」について説明した文章として、最も適当なものを次の①～④の中から一つ選べ。

12

①カルビンは、スージーにお金を払って宿題をやらせようとした。
②カルビンは社会や国語、作文が苦手な子どもだ。
③カルビンは計算の出来ないスージーを馬鹿にした。
④カルビンはイギリスの人気漫画に登場する子どもだ。

問七　傍線部（三）「心像という言葉を持ち出したのはそのため」とあるが、その理由を説明した文章として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

13

①心像という言葉は、図像などの視覚的な映像のみを指し示すことができる言葉だから。
②心像という言葉は、心理現象だけでなく客観的事実まで指し示すことができる言葉だから。
③心像という言葉は、視覚化できない触覚や聴覚などの全ての心理現象を含む言葉だから。
④心像という言葉は、誰もがよく使用する一般的でなじみのある言葉だから。

問八　傍線部（四）「太陽」と私たちとの関係を説明した文章として適当でないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

14

①私たちは地球が自転していることを知らずに何万年も生きてきた。
②私たちには太陽が東から昇り、西へと沈んでいくとしか見えない。
③私たちは動いているのは太陽であって、自分たちではないと感じる。
④私たちは「地球が自転している」という事実を経験することができる。

問九　本文の内容と一致するものはどれか。次の①～④の中から最も適当なものを一つ選べ。

15

①なぜこう楽しいのか、感じている本人にはその理由は常に明確である。
②思考とは心像と心像の間に関係を作り上げる働きのことである。
③われわれの心の働きに重要なのは、心像ではなく客観的事実である。
④考えるという行為は、哲学者や科学者だけが行うことである。

第二問　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

土井が重視しているのは、「はからい」を超えた自然の力であり、行き過ぎた作為の超克である。人間がなせることには決定的な限界がある。土井は、「どうしたらレシピに頼らず、おいしいものができるのでしょうか」という問いに対して、次のように述べている。

まずは、人が手を加える以前の料理を、たくさん体験するべきですね。それが一汁一菜です。ご飯とみそ汁とつけもんが基本です。そこにあるおいしさは、人間業ではないのです。人の力ではおいしくすることのできない世界です。みそなどの発酵食品は微生物がおいしさをつくっています。ですから、みそ汁は濃くても、薄くても、熱くても、冷たくても全部おいしい。人間にはまずくすることさえできません。そういった毎日の要になる食生活が、感性を豊かにしてくれると、私は考えています。

土井が追求するのは、(一)「人間業ではない」おいしさである。生活の要になる日常の食事には、安心感が必要である。毎日食べているのに、食べ飽きないこと。安堵に包まれること。そんな料理は、常に人間のはからいを超えている。「食べ飽きないご飯とお味噌汁、漬物は、どれも人間がイト(A)してつけた味ではありません」。

ごはんは米をといで水加減して炊いただけ、みそも漬物も微生物が作り出したもので、そこには小さな大自然ができています。自然の山の景色とかイチリン(B)の花の美しさとか、見飽きることがありませんよね。それと同じです。

ご飯や味噌汁は、「小さな大自然」である。料理し食事をすることは、自然と［ア］に交わることに他ならない。私の中にミクロコスモスが入ってくることで、マクロコスモスとつながる。その連続性を感受することで、安心感が生まれる。「どんな食材を使おうかと考えることは、すでに台所の外に飛び出して、社会や大自然を思っていることにつながります」。

土井は、ＮＨＫ『きょうの料理』で、「新米で作る真っ白の塩むすび」を取り上げたことがある。手で米に触れる。ほどよい大きさ、固さに整える。塩加減を整える。私たちに出来ることは整えることだけ。そこにおいしさが自ずから現れる。心が落ちつく。「ほんとうのおいしさは安心感をともなうのです」

メディアで紹介される［　イ　］な食べ物は、すぐに廃(すた)れる。それはあくまでも非日常のトクシュ[c]なものであり、日常を非日常で埋め尽くすと、体が疲れる。食べ続けることは出来ない。

土井は、ハレの価値観をケの食卓に持ち込みすぎていると指摘する。多くの人が毎日の献立に悩んでいるのは、家庭の日常の中に、新規のものを取り込もうとしすぎているからである。

そこで土井が提唱するのが、「一汁一菜」のすすめである。現代人は忙しい。なかなか料理の時間をとることが出来ない。毎日の料理が負担になる。そのような状況に対し、土井はシンプルを追求することを説く。「簡単は手抜きじゃない」

大切なのは、自然と人間の交わりを整えること。そこに、おいしさとアンソク[D]が生まれる。「普通のおいしさとは暮らしの安心につながる静かな味」である。「切り干しのおいしさは、「普通においしい」のです」。

土井が重視するのは、その土地の食文化と風土の連続性である。そこには、個人のはからいを超えた力が存在する。

それは百年や二百年という短い時間でできたものではありません。千年、いやそれ以上、人間の歴史と同じだけの長い時間を掛けて少しずつ経験して蓄積してきたものです。

土井の料理は、自然と交わると共に、死者と交わっている。それは決して名のある料理人たちではない。無名の庶民たちが、歴史の風雪に耐えて[a]残してきた英知である。特定の個人の理性によって作りあげられたものではなく、理性を超えた集合的経験値によって伝えられてきた良識である。

庶民は、毎日毎日、同じことを繰り返してきた。現代人は、その繰り返しを退屈で凡庸なものと見なしがちである。しかし土井は、同じ事の繰り返しだからこそ気づくことがあるという。

素材を手にする。見た目や手触り、匂いなどによって状態を見極め、どう料理するかを判断する。食材と言葉を超えた対話を繰り返す。そして、ほどよい加減に調理し、味を調（ととの）える。このプロセスは、極めて動的でダイナミックな活動である。五感を使い自然と交わる。ミクロコスモスと私を調合していく。土井は言う。「たった一つの石ころとでも友達になれるのです」。

土井は、料理の音・匂い・ケハイ[E]も食事だという。その一連のプロセスが交わることで、家族の安心が生まれる。「台所の安心は、心の底にある揺るぎない平和です」。

土井は、現代の資本主義の過剰に(b)警笛をならす。競争原理の中に埋没すると、大切な物が見えなくなる。生きるために殺し合うという矛盾が生じる。

人々は忙しくなることで、料理を省略するようになった。そして、料理の時間を煩わしいと捉え、外食によって置き換えようとしてきた。しかし、そのような慌ただしい日常は、大切な日常を置き去りにしてきた。(二)料理から遠ざかれば遠ざかるほど、人々は自然から疎外され、心の平穏を失ってきた。シンプルでいい。簡素でいい。料理を取り戻したい。それが土井の切なる願いなのだろう。

土井の根底にあるのは、太陽からの贈与という観念である。食材はすべて「お天道様からいただいたもの」である。食事は太陽からの贈与を受け取る瞬間である。

お料理と人間とのあいだに箸を揃えて横に置くのは、自然と人間、お天道様から生まれた恵みと人間とのあいだに境を引いているのです。私たちは「いただきます」という言葉で結界を解いて食事をはじめるのだと考えられます。

私たちは、太陽からの［ウ］贈与がなければ生きていくことが出来ない。にもかかわらず、私たちは自分たちの努力によって生きていると勘違いしている。自己の力への過信が蔓延している。そこに「お天道様を心に（いつもは）置くことができなくなった私たち」が存在する。

土井が提唱する一汁一菜は、「お天道様と人間の関係」を整え直すことにつながる。

秩序いうのは、自然ですよ。お天道様とつながるところには、草木の正しさがあります。［　エ　］な日本の暮らしにはそれがあって、一汁一菜というのが日本人の食のスタイルです。土台は大自然とのつながりだし、その風土の中で生まれたのが食文化です。それが、地球をすみかとする人間の条件です。

土井の願いは、料理と食事の時間を取り戻すことで、自然との関係性を取り戻すことに帰結する。人間の思い上がりやはからいを諌め、「お天道様からの恵み」に謙虚になること。力ずくの料理をやめて、素材を整えることに専念すること。混ぜすぎない。味付けしすぎない。計りすぎない。自己の賢しらな考えよりも、自然の力と歴史の力に委ねること。そんな料理の時間を取り戻すことで、心の平穏を回復することが重要だと、土井は言う。

ポストコロナの価値観を探求しなければならないところに、私たちは立たされている。それは、何よりも環境問題に帰結するだろう。ウイルスの生息地を奪ってきた人間のエゴイズムに、痛切な反省が求められる。グローバル資本主義を見直し、グリーンインフラに力を注がなければならない。

［　オ　］、重要なのは、そんな壮大なことよりも、まずは私たちの日常を整え直すことなのではないだろうか。毎日の料理と食事のあり方を見つめ直すことから、自然との関係を(c)再構築すべきではないだろうか。

ステイホームによって「家食」が見直される中、土井義晴の料理は、静かに文明のあり方を問うている。

（中島岳志「一汁一菜のコスモロジー　―土井善晴論」による）

問一　傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A　イト

①数年前にトベイした　②気持ちをトロする
③課題トショを読む　④趣味はトザンです
⑤才能にシットした

16

B　イチリン

①リンジンと親しい　②自転車のシャリン
③リンギョウを生業とする　④台風でリンジ休校になる
⑤玄関のヨビリンを鳴らす

17

C　トクシュ

①予防セッシュを受ける　②シュリョウした獲物
③舞台装置のシュコウ　④約束をゲンシュする
⑤シュショウな態度

18

D　アンソク

①ソクバクに耐える　②天体カンソク
③新しいキソク　④静かにタンソクする
⑤エンソクに行く

19

E　ケハイ

①習慣にシハイされる　②ハイゴから声をかける
③まずハイケイと書いた　④風邪からハイエンになった
⑤ハイシャ復活でよみがえる

20

問二　空欄 ア ・ イ ・ ウ ・ エ ・ オ に入る最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア　①間接的　②総合的　③直接的　④多面的　21

イ　①合理的　②刺激的　③画期的　④現実的　22

ウ　①一方的　②儀礼的　③相互的　④致命的　23

エ　①社会的　②具体的　③実用的　④伝統的　24

オ　①たとえば　②しかし　③それから　④だから　25

問三　傍線部（a）・（b）・（c）の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

（a）風雪に耐えて

①前後の矛盾なく筋道を通して　②万物はたえず変化し移り変わって　③万事支障なく経過して　④意志をもって苦労や困難に立ち向かって　⑤世間の試練や苦しみを乗り越えて

26

（b）警笛をならす

①先頭に立って物事を進める　②危険を予告し注意をうながす　③力の限りを尽くして努力する　④他の人のために力を貸す　⑤うまく進行するように誘導する

27

（c）再構築

①基本的にかたちを変えず、他の使い方で用いること　②古くなったものを見直し、一新すること　③基礎の構えから始めて、全体を築くこと　④不十分なところを改めて、一層よくすること　⑤すでにあるものを打ち壊し、組み立て直すこと

28

問四　傍線部（一）「「人間業ではない」おいしさ」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から選べ。　29

①考え抜かれたレシピが生み出すシンプルな味
②調味料を一切用いない素材だけの味
③自然が作り出す安心できて飽きない味
④ケ（日常）の食卓をハレ（非日常）の食卓に変える味
⑤現代人が千年以上前に忘れてしまった静かな味

問五　傍線部（二）「料理から遠ざかれば遠ざかるほど、人々は自然から疎外され、心の平穏を失ってきた」とあるが、その説明として当てはまらないものを、次の①～⑤の中から選べ。　30

①料理し食事することそのものが社会や大自然と繋がる行為である
②素材を整えるだけの簡単な料理は、自然と人間の交わりを整えることにも通じている
③料理と食事をおろそかにすることは平穏な日常生活を軽視することに他ならない
④食事だけでなく料理の時間を大切にする「家食」でしか安心感を得ることはできない
⑤個人を超越した自然や歴史の力によってわれわれは生かされている

問六　本文の内容と異なるものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

①食べ飽きないご飯や味噌汁、漬物は、自然の力を実感でき、安心感を与えてくれる
②微生物を含む自然のはかり知れない力によって食事を通じて人間は自然と交わって生きている
③「一汁一菜」は手抜きではあるが、忙しい現代人にとってはふさわしい
④自然のはからいや太陽からの恵みに感謝することで心の安寧を得ることができる
⑤行き過ぎた資本主義を見つめ直し、日常生活に安心感を取り戻すことが必要だ

31